

2023 年 1 月

食料安全保障月報

(第 19 号)



令和 5 年 1 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2023 年 1 月食料安全保障月報（第 19 号）

目 次

概要編

I	2023 年 1 月の主な動き	1
II	2023 年 1 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「米国の穀物等の生産・輸出動向」	5

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 2023/24 年度の冬小麦の播種面積は 8 年間で最大	
	＜カナダ＞ 2023/24 年度の小麦全体の生産量は、34.3 百万トンと増加の見込み	
	＜豪州＞ 収穫がほぼ終了、生産量は史上最高の 36.6 百万トン	
	＜EU27+英国＞ 増加した EU27 の輸入量の多くはウクライナ産	
	＜中国＞ カナダ産小麦の輸入が増加	
	＜ロシア＞ 2023 年 2 月 15 日から同年 6 月 30 日まで穀物輸出枠 2,550 万トン	
	＜ウクライナ＞ 生産量は前月予測から上方修正も、前年度比 36.4%減少の 21.0 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は収穫面積・単収減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 生産量は史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 干ばつが生産量に影響を与える懸念（輸出税継続）	
	＜中国＞ 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアによる侵攻により、輸出量は前年度より 24%減	
3	コメ	15
	＜米国＞ 生産量減少により長粒種の価格が更に上昇、輸出量は減少	
	＜インド＞ ラビ米の作付けは前年度よりも速いペースで進捗	

- <中国> 南部の干ばつ等で減産
- <タイ> 東南アジアや中東向けの輸出が好調
- <ベトナム> 秋冬作の収穫終了による供給減少等から価格が上昇

II 油糧種子

- 大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
- <米国> 生産量は減産、輸出減の見通し
- <ブラジル> 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し
- <アルゼンチン> 干ばつが生産量に影響を与える懸念（輸出税継続）
- <中国> 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し
- <カナダ> 収穫面積は減少も、単収の増加により増産

（参考 1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2022/23 年度）・・・ 2 7

（参考 2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7

【利用上の注意】

表紙写真：豪州 サウスオーストラリア州の小麦圃場の小麦の収穫（1 月 6 日撮影）
 サウスオーストラリア州では、天候に恵まれ収穫が順調に進展した。
 豪州では史上最高の小麦生産量（3, 660 万トン）が見込まれている。

(概要編)

I 2023 年 1 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球での収穫はほぼ終了し、南米では生育期を迎えている。

品目別にみると、1月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、世界の生産量が前年度より増加する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、前年3月には過去最高を更新した国際相場も侵攻前の水準まで戻したものの、引き続き高水準で推移している。前年7月のウクライナの穀物輸出に関する4者合意は2023年3月19日まで延長されたが、今後も注視が必要。

とうもろこしについては、米国や欧州の乾燥等の影響により、世界の生産量が前年度より減少する見通し。一方、大豆については、米国は減産も、ブラジルで増産となり、世界では増産となる見通し。いずれの品目も旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：12月）については、11月から下落（135.0→132.4）しているものの、引き続き高い水準を維持（参考：前年12月の値は133.7、前々年12月の値は108.6）。

海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近5カ年の平均値の4割程の水準で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2023年1月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の1月20日報告によると、2022/23年度の小麦は収穫が終了し、収穫予定面積のほぼ100%に当たる2,020万トンが収穫された。遅れていたとうもろこし等の夏作物も収穫が終盤となり、とうもろこしは収穫予定面積の87%に当たる2,440万トンが収穫された。

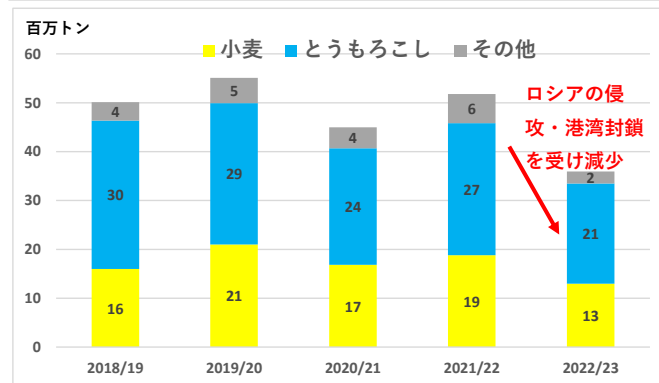
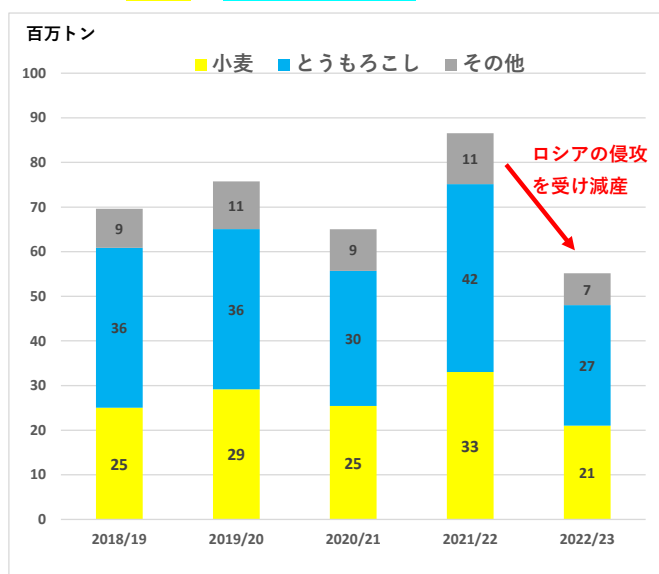
2023/24年度の冬小麦の作付けは、2022年11月28日報告によると計画の94%に当たる380万ヘクタールが終了した。

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（当初11月19日まで）を受け、8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開され、さらに、11月には2023年3月19日まで延長された。2022年12月31日時点で、輸出量は1,631万トン（うち、とうもろこし740万トン、小麦464万トン他）。目的地はスペイン、中国、トルコ、イタリア等。

米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、2022/23年度の小麦の生産量は、前月見通しから50万トン上方修正され2,100万トン（対前年度比36%減）、輸出量は前月から50万トン上方修正され1,300万トン（同31%減）の見通し。

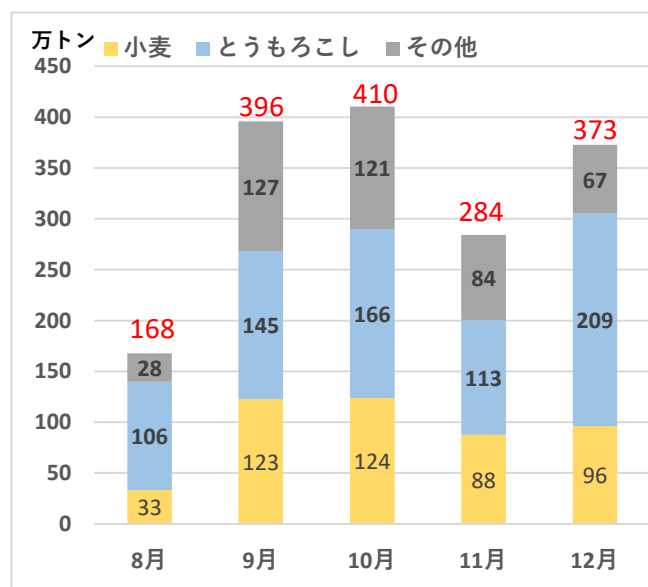
一方、とうもろこしの生産量は、前月見通しから変更なく、収穫期の降雨過多やロシアの攻撃による収穫遅れにより2,700万トン（同36%減）、輸出量は、前月見通しから300万トン上方修正され2,050万トン（同24%減）の見通し。

（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1） 注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）黒海からの輸出量の推移（月毎）



注：その他はひまわり油・大麦など陸路による輸出を除く。

1 ブラジルの夏とうもろこし、大豆の生育は降雨に恵まれ順調

夏とうもろこし、大豆については、南部は乾燥の影響を受けているが、北部から主産地のマットグROSS州を含む中西部にかけて降雨に恵まれ、おおむね順調に生育している。ブラジル食料供給公社（CONAB）の1月見通しによれば、大豆は1億5,270万トン（21.6%増）の生産見通し。とうもろこしは現在生育中の夏とうもろこし2,650万トンと大豆収穫後に作付けされる冬とうもろこし9,860万トンの合計で1億2,510万トン（10.5%増）の見通し。

2 アルゼンチンの穀物は乾燥の影響で減産見通し

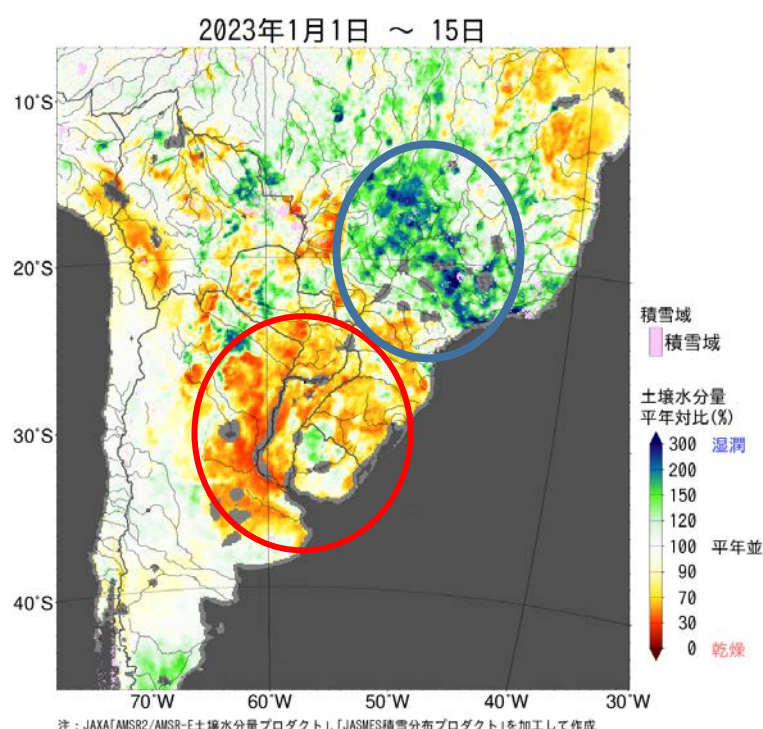
ブエノスアイレス穀物取引所の1月12日及び19日の見通しでは、小麦は収穫が終了したが、乾燥の影響で生産量は、1,240万トン（前年度2,240万トン）と大きく減少する見通し。とうもろこし、大豆については、降雨不足で大幅に作付けが遅れ、生産量はそれぞれ4,450万トン（同5,200万トン）、4,100万トン（同4,300万トン）と前年度より減少する見通し。

輸出規制等に関し、大豆には、輸出促進の為替レートの設定は12月で終了し、大豆の輸出税は33%で維持も、一時的に引き上げられていた大豆油と油かすの輸出税は31%に引き下げられ、とうもろこし、小麦については12%を維持している。

（参考）1月前半の南米の土壌水分量平年対比（JASMAI）

ブラジル北部から中西部にかけ水分量が多く（青丸）

ブラジル南部からアルゼンチンにかけて少ない（赤丸）



3 ロシアは史上最高の豊作も2月15日から6月末まで穀物輸出枠2,550万トン設定

米国農務省（USDA）の1月見通しによれば、ロシアの2022/23年度の穀物生産見通しは史上最高の1億3,250万トン（前年度比16%増）。そのうち、小麦は9,100万トン（同21%増）で史上最高となり、大麦は2,100万トン（同20%増、史上最高）、とうもろこしは1,400万トン（同8%減）、コメは52万トン（同26%減）の見通し。

一方、ロシア政府は2022年12月30日に、2023年2月15日から6月30日まで2,550万トンの穀物輸出枠の設定を決定した。小麦、とうもろこし、大麦、ライ麦が含まれるが穀物別の割当は設定されていない。ただし、前年度同時期の輸出枠（小麦800万トン、とうもろこし、大麦、ライ麦計で300万トン）より大幅に増加している。なお、今まで課せられてきた輸出税は並行して課せられる。また、コメについては前年度に実施されていた輸出禁止が本年6月30日まで延長された。

Ⅱ 2023 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、前年12月末、290ドル/トン台前半で推移。1月に入り、ロシア等の黒海諸国からの小麦供給が潤沢なことや、豪州の豊作、ドル高から260ドル/トン台後半に値を下げたものの、米国冬小麦産地での作柄の悪化やとうもろこし価格の上昇への追随から270ドル/トン台半ばに値を上げた。その後、米国産小麦の輸出需要の低迷見込みやアルゼンチンでの降雨予報による大豆、とうもろこし価格の低下への追随から値を下げ、1月下旬現在、270ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、前年12月末、260ドル/トン台後半で推移。世界的な景気後退による需要低迷への懸念、原油価格の下落やドル高等から、1月上旬に250ドル/トン台後半まで値を下げた。その後、アルゼンチンの高温・乾燥による作柄悪化懸念の一方、米国産の低調な輸出状況から、1月中旬までほぼ横ばいで推移。USDAの1月報告で米国、アルゼンチン等の生産見通しの下方修正等を受け、値を上げたが、アルゼンチンでの降雨予報により一時値を下げ、1月下旬現在、260ドル/トン台後半で推移。

コメは、前年12月末、490ドル/トン台前半で推移。1月に入り、更なるバーツ高や、インドネシアによる政府備蓄不足の回復のためのタイからの輸入増に加え、中東諸国からの需要増等により値を上げ、1月中旬現在、530ドル/トン台後半で推移。

大豆は、前年12月末、550ドル/トン台後半で推移。世界的な景気後退による需要低迷への懸念、原油価格の下落やドル高等から、1月上旬に540ドル/トン前後まで値を下げた。その後、アルゼンチンの高温・乾燥による作柄悪化懸念に加え、USDAの1月報告で米国の生産見通しの下方修正等を受け、値を上げたが、アルゼンチンでの降雨予報により一時値を下げ、1月下旬現在、550ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 680 万トン下方修正され 27.3 億トン。消費量は、前月予測から 700 万トン下方修正され 27.6 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫率は前年度を下回り 27.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦で上方修正も、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.3 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦で上方修正も、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正も、とうもろこしで下方修正され、4.8 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.6 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

(注：数値は1月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫率は前年度を上回り、19.3%となる見込み。

(注：数値は1月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：米国の穀物等の生産・輸出動向

2022/23年度の米国の穀物・大豆生産については、夏季の高温乾燥の影響等を受け、ほぼ前年度並みの小麦を除き、とうもろこし、大豆、コメなどが減産となった。また、輸出について、減産に加え、ブラジルや豪州、ロシアなどの豊作見通しから伸び悩んでいる。さらに乾燥の影響を受けたミシシッピ川などの水位低下によるはしけ運賃の高騰などの懸念材料もある。今後の見通しも含め、米国の穀物等の生産と輸出動向、期末在庫率、世界の穀物需給への影響についてまとめた。

注：文中の「2022/23 年度」等は穀物年度で、米国の小麦は 2022 年 6 月から 2023 年 5 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1. 生産量

表 過去 10 年間の米国の小麦、とうもろこし、大豆の生産量

		単位：百万トン、%									
		2013/14	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19	2019/20	2020/21	2021/22	2022/23 対前年度比
(1) 小麦 米国農務省 (USDA) の 1 月報告では生産 量は据え置か	小麦	58.1	55.1	56.1	62.8	47.4	51.3	52.6	49.8	44.8	0.2
	とうもろこし	351.3	361.1	345.5	384.8	371.1	364.3	346.0	358.4	382.9	-8.9
	大豆	91.4	106.9	106.9	116.9	120.1	120.5	96.7	114.7	121.5	-4.2

赤太字は過去10年で一番少ない年、青太字は過去10年で一番多い年、赤、青細字はそれぞれ2番目

出典：米国農務省「PS&D」(2023.1)を農林水産省で加工

れ、小麦全体で、前年度を0.2%上回る4,490万

トンとなった。直近10年間でみると最も生産量が少ない前年度に次ぐ低水準。内訳をみると、冬小麦は3,004万トン(前年度比13.6%減)、春小麦は1,312万トン(同45.7%増)、デュラム小麦は174万トン(同69.9%増)となった。冬小麦は、主要生産地の干ばつの影響で前年度に比べ生産量が減少した一方、春小麦、デュラム小麦は、降雨過多による播種遅延があったものの、その後は天候に恵まれ、乾燥により減少した前年度から生産量は回復した。

なお、2023/24年度の冬小麦については、穀物価格の上昇から作付面積が大きく増加し、対前年度比11%増、過去8年間で最高の1,495万ヘクタールとなった。現在、越冬期で乾燥の懸念はあるものの、雪解け後の春の天候が単収決定に大きな影響を与えるとみられる。

(2) とうもろこし

収穫面積の減少(対前年度比7.2%減)に加え、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥により単収が低下(同1.9%減)したことから、生産量は2021/22年度(史上2位)と比べ8.9%減の3億4,875万トンとなった。USDAの1月報告では、収穫面積の下方修正により、前月見通しから510万トン下方修正された。直近10年間でみると、2015/16年度、2019/20年度に次ぐ低水準。

(3) 大豆

収穫面積は前年度からわずかに増加したものの、夏季のコーンベルトの一部での高温・乾燥により単収が低下(同4.3%)したことから、生産量は前年度比4.2%減の1億1,638万トンとなった。USDAの1月報告では、単収及び収穫面積の下方修正により、前月見通しから190万トン下方修正された。直近10年間でみると5位と平均を少し上回る水準である。

(4) コメ

米国での生産量は小麦等の作物と比較して少ないが、長粒種・中短粒種合計で前年度比16.3%減の509万トン(精米トン)となり、1993/94年度以来29年ぶりの低水準。コメ生産の大半を占めるミシシッピ川下流域で栽培される長粒種については、大豆やその他作物の収益性が良いことから作付けがシフトし、前年度比11.5%減の407万トン。また、カリフォルニア州などで主に栽培される中・短粒種については、干ばつによる灌漑用水の不足から収穫面積が減少し、生産量は前年度比31.5%減の102万トン。

2 輸出動向と期末在庫率

(1) 小麦

USDA の 1 月見通しによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度比 3.2% 減の 2,109 万トンの見込み。米国産小麦の最近 2 年間の生産量の減少に加え、ロシア、ウクライナ等の黒海諸国や豪州など他の輸出国と比べ輸出価格が高いこともあり、輸出が伸び悩んでいる。

期末在庫率はここ 2 年間の減産に伴い低下しており、29.8% と 9 年ぶりの低水準である。

(2) とうもろこし

USDA の 1 月見通しによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度比 22.1% 減の 4,890 万トンの見込み。2022/23 年度の減産に加え、ミシシッピの水位低下による国内運賃の高騰、ブラジルの増産などから輸出競争力が乏しいことも背景にあるとみられる。

期末在庫率は、輸出が 2020/21 年度、2021/22 年度と、好調であったことや、2022/23 年度の減産などにより、

過去 3 年間連続で 10% を下回る低水準で推移しており、2022/23 年度は 8.9% と過去 10 年間で 2 番目に低い水準（2020/21 年度の 8.3% が最低）。

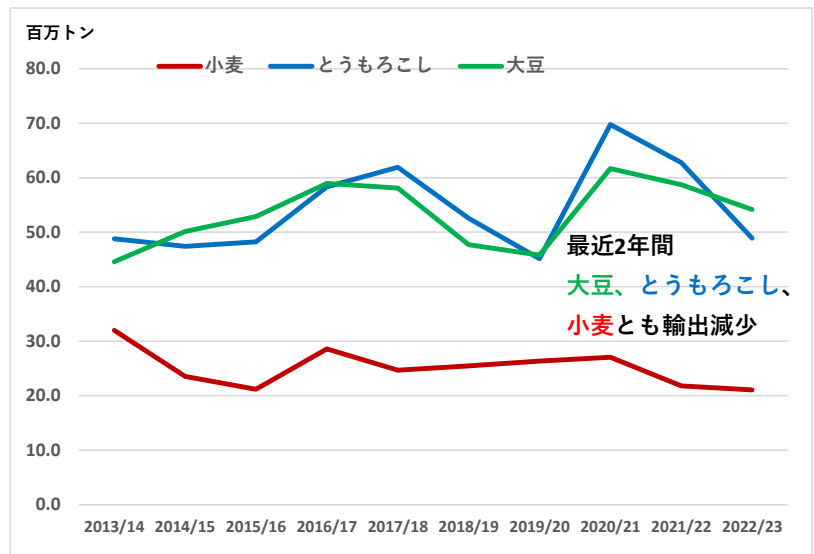
(3) 大豆

USDA の 1 月見通しによれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度比 7.8% 減の 5,416 万トンの見込み。2022/23 年度の減産に加え、とうもろこし同様、ミシシッピの水位低下による国内運賃の高騰、ブラジルの増産などから輸出競争力が乏しいことも背景にあるとみられる。期末在庫率は、国内需要増などにより 2019/20 年度以降低下し、2022/23 年度は 4.8% と 2013/14 年度以来 9 年ぶりの低水準。

(4) コメ

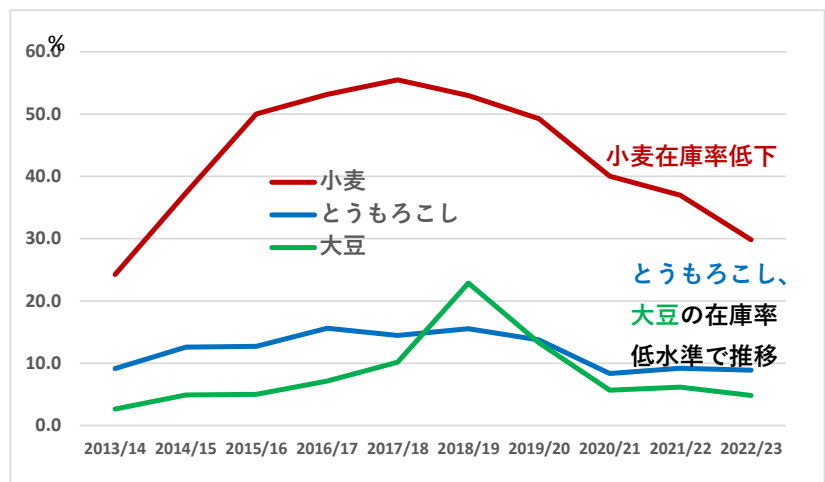
生産量の減少などからここ 3 年間連続で輸出量は減少しており、特に 2022/23 年度は大幅に減少して、210 万トンと、1985/86 年度以来 37 年ぶりの低水準。他方で、2022/23 年度の輸入量は 143 万トンと過去最高の見通し。

図 1 過去 10 年の米国の小麦、とうもろこし、大豆の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

図 2 過去 10 年の米国の小麦、とうもろこし、大豆の期末在庫率の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

3 米国の穀物輸出と国際貿易の状況

(1) 小麦

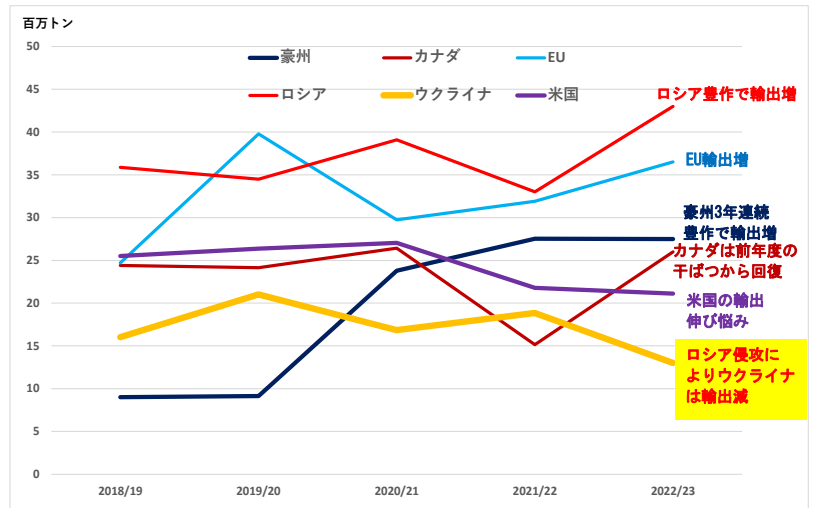
主要輸出国では、豪州、ロシアで史上最高の豊作が見込まれている。カナダでも干ばつだった前年度から輸出量は大きく回復し、EUでも小麦は干ばつの影響を免れた。このような主要輸出国の豊作見通しやウクライナからの輸出再開を受け、国際相場は、ウクライナ侵攻前の水準まで下落した。米国产は輸出価格が高く、輸出は伸び悩んでいる。

主要輸入国では、ウクライナからの輸入が多かったエジプトは、国内産の増産により輸入は減少しており、不足分はロシアからの代替輸入を増加させている。インドネシアは、ウクライナ産の代替として豪州産の手当てを増加させている。両国とも 2022/23 年度の輸入量は 1,100 万トン(以下 USDA 見通し)で世界最大の小麦輸入国。

中国は、安価で低たんぱくの豪州産を中心に輸入してきたが、高たんぱくの小麦を中心に米国产、カナダ産の輸入を行うとみられている。輸入量は、2020/21 年度は、畜産需要増により 1,062 万トンまで増加したが、それ以降、輸入量は伸び悩み、2022/23 年度は国内産小麦が史上最高の豊作で小麦の備蓄が十分にあるとみられており、950 万トンの輸入の見通し。

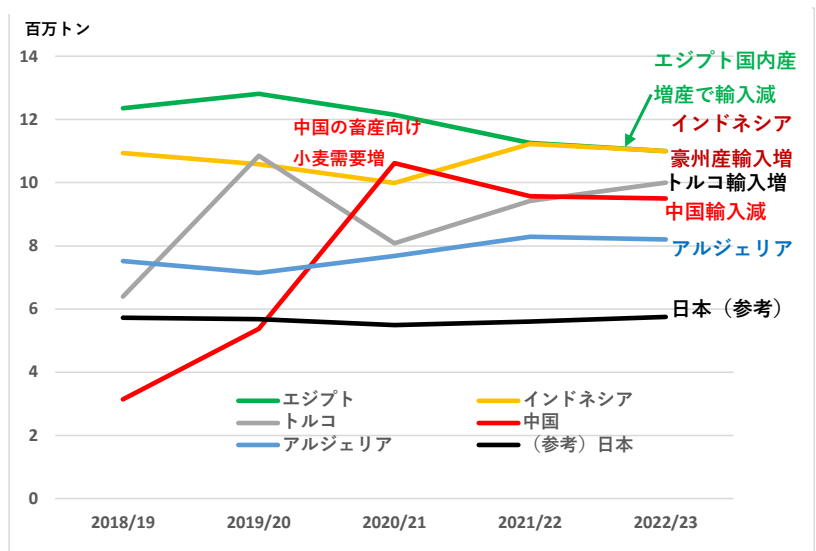
トルコは、前年の 7 月にはウクライナの黒海穀物輸出の仲介役を担い、ウクライナ産を中心に小麦輸入を 1,000 万トンに増加させ、世界第 3 位の小麦輸入国となる見通し。

図 3 主要小麦輸出国の輸出量の推移



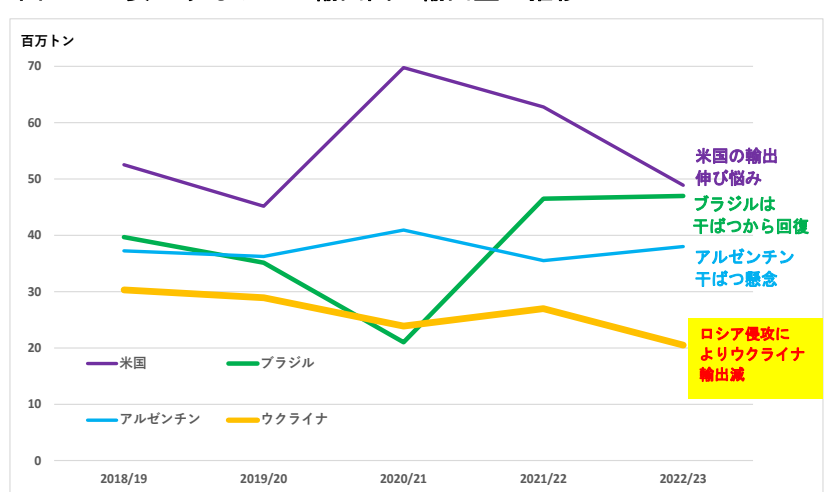
出典：米国農務省「PS&D」(2023.1)を農林水産省で加工

図 4 主要小麦輸入国の輸入量の推移（我が国は 11 位）



出典：米国農務省「PS&D」(2023.1)を農林水産省で加工

図 5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2023.1)を農林水産省で加工

(2) とうもろこし

主要輸出国では、小麦と同様、ウクライナの輸出量がロシアの侵攻により減少、米国でも高温乾燥による減産や輸出価格上昇で輸出が伸び悩んでいる。

一方、ブラジルでは、2021/22年度の冬とうもろこしが豊作、2022/23年度も豊作見通しを受け輸出増加の見通し。

生育期を迎えているアルゼンチンでは、60年に一度ともいわれる干ばつが報じられており、今後とも乾燥が継続する場合、輸出量が減少する恐れがある。

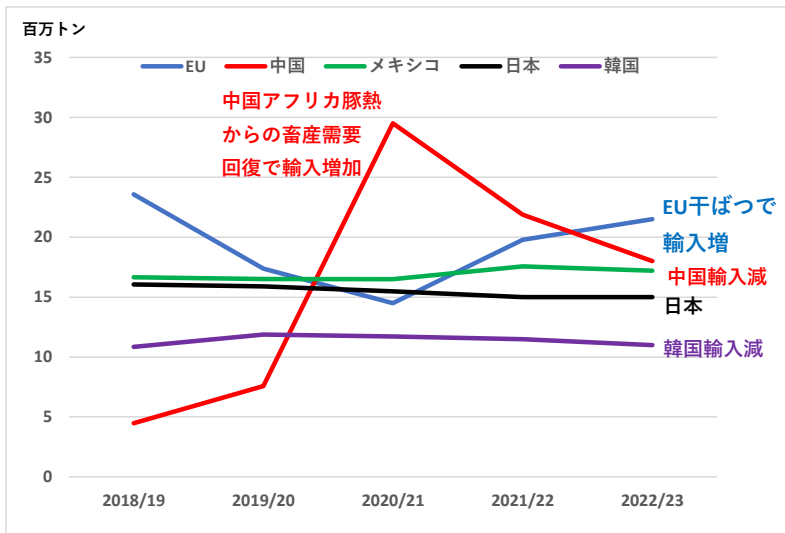
主要輸入国では、夏季の干ばつによりとうもろこしが大きく減産となった EU の 2022/23 年度の輸入量（2,150 万トン）が中国の輸入量（1,800 万トン）を上回る見通し。EU は非 GMO とうもろこしを生産しているウクライナ産の輸入を黒海経由に加え、陸路輸送等により増加させた。一方、中国は、米国産の輸入に加え、ウクライナ産を 2021 年は黒海経由で 800 万トン輸入していたが、2022 年は米国やウクライナ産の輸入が減少となった一方で、前年 11 月からブラジル産の輸入を開始した。

(3) 大豆

輸出国では、米国が 2022/23 年度の減産に伴い、輸出が低調となる見通し。これに対し、ブラジルでは主産地のマット・グロッソ州などで適度な降雨に恵まれ、生産量の見通しは 1 億 5,000 万トンを超えることから、輸出量は前年度より大幅に増加し、米国の輸出量の減少分を補ってさらに余りある見通しで、世界の輸出量合計も増加する見通し。また、アルゼンチンはとうもろこし同様、干ばつの影響により輸出減少となる恐れがある。

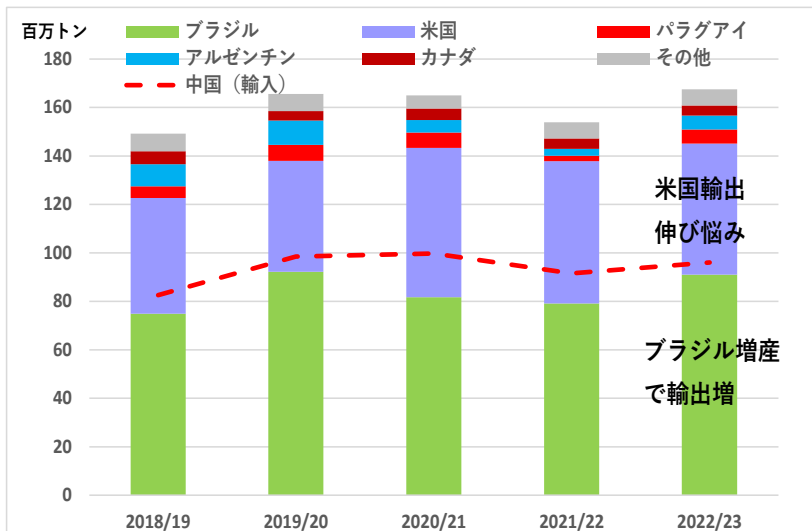
世界最大の輸入国である中国の 2022/23 年度の大豆生産量が 2,030 万トンと史上最高の豊作となったことから、輸入量は USDA の 1 月見通しで 200 万トン下方修正され、9,600 万トンの見通し。なお、本年 1 月 8 日からゼロコロナ政策の解除を行ったことから一時的に感染者は増加している模様であるが、穀物貿易関係者の中では、今後、大豆を始め穀物需要が回復するとの見方もある。また、1 月 17 日の国家統計局の 2022 年のレポートでは、中国の経済成長の鈍化や 61 年ぶりの人口の減少などが公表された。これらが長期的に、今後の大豆を始めとする中国の穀物需要や輸入にどのような影響を与えるか引き続き注視する必要がある。

図 6 主要とうもろこし輸入国の輸入量の推移（我が国は 4 位）



出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

図 7 主要大豆輸出国の輸出量の推移（参考：中国は輸入量）

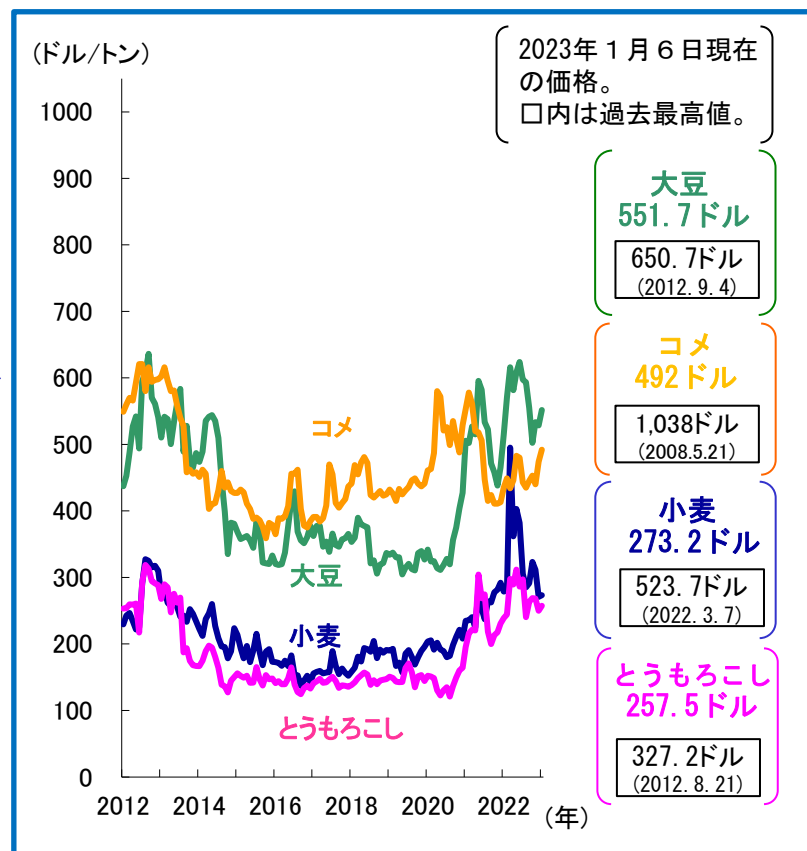
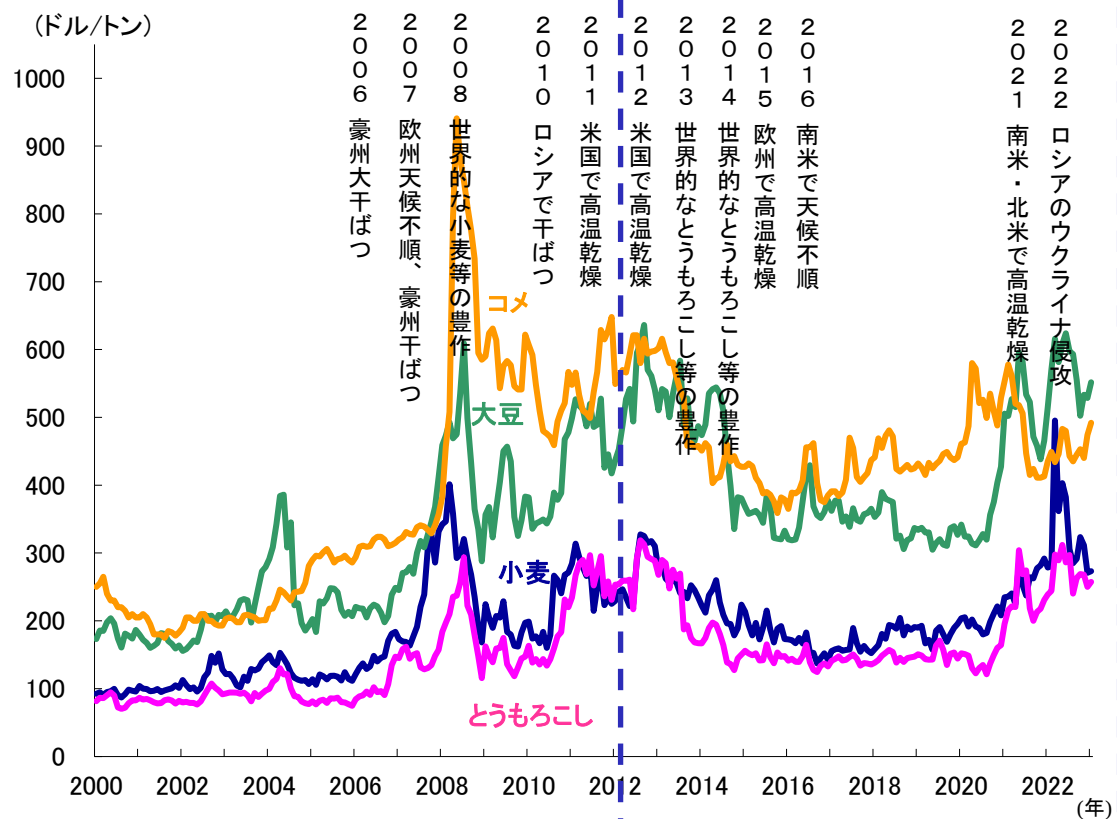


出典：米国農務省「PS&D」（2023.1）を農林水産省で加工

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、小麦は史上最高値を更新。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



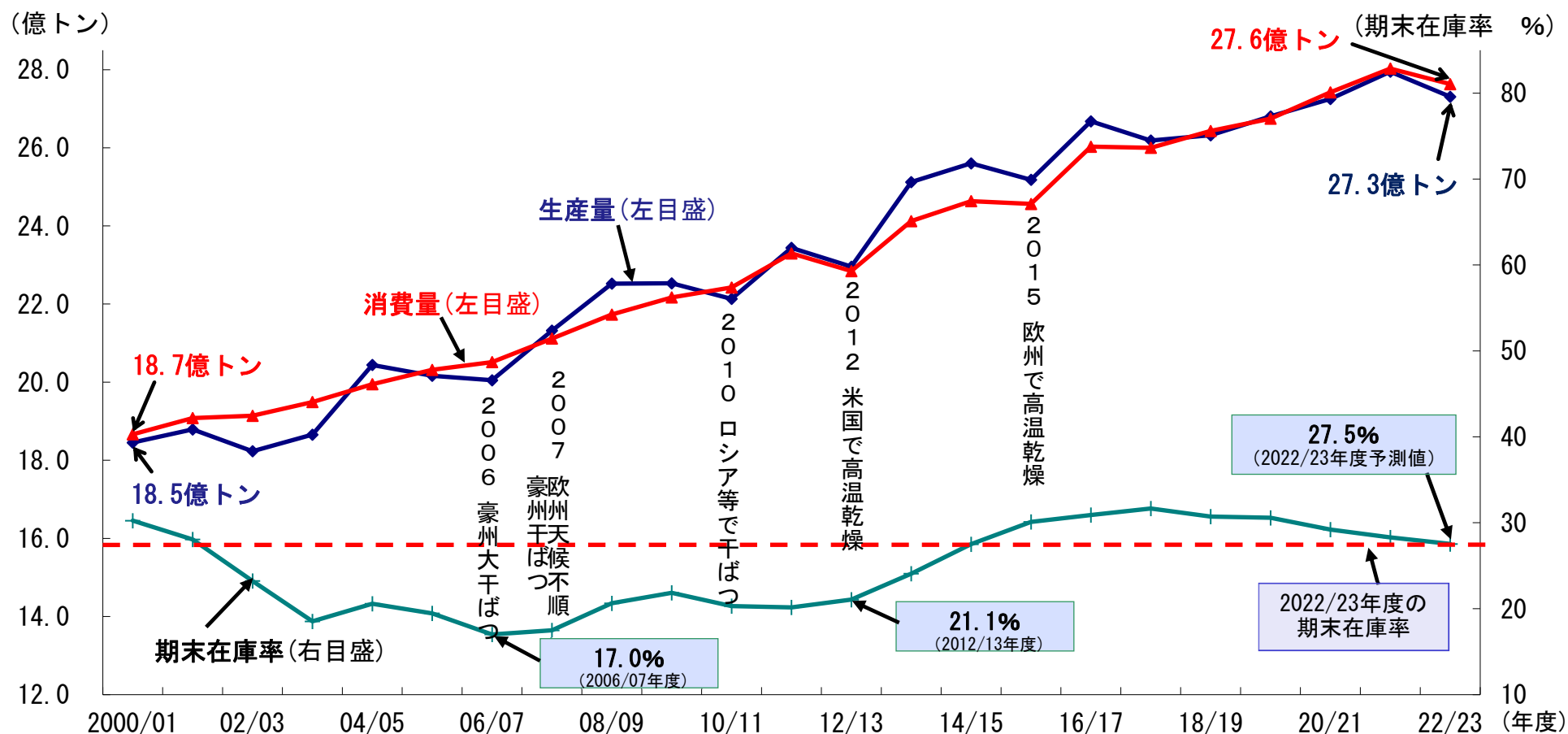
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。玉米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、2023年第1水曜日の玉米価格は未公表のため、2022年12月21日の価格である。

注2：過去最高価格については、玉米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、玉米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.5%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.1%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

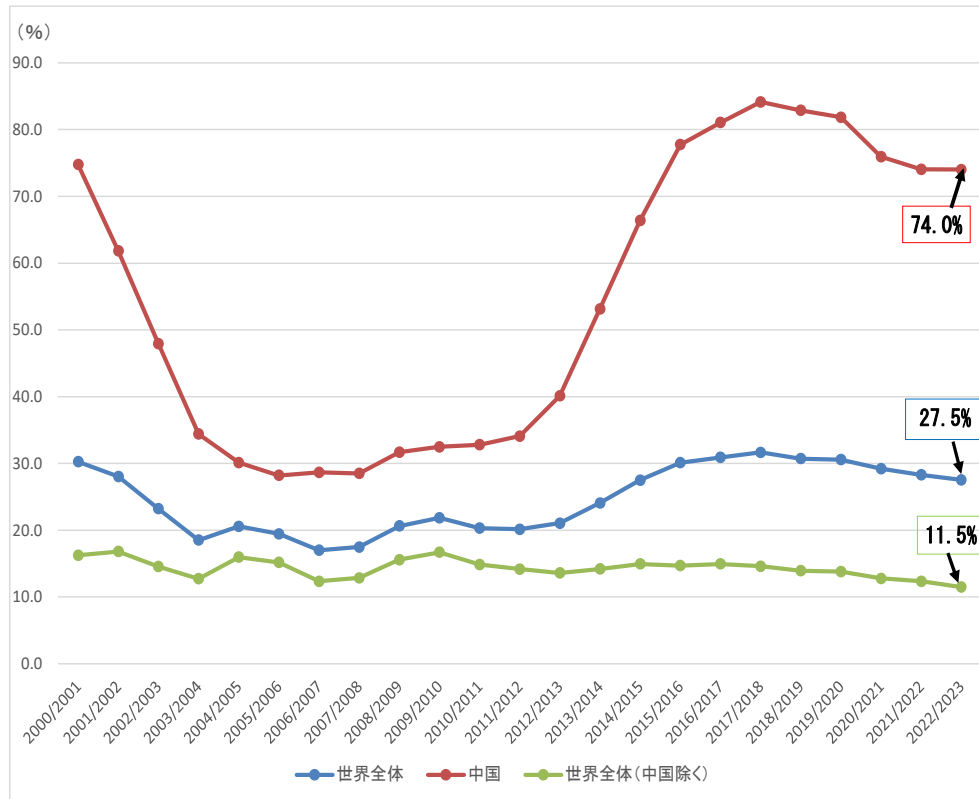


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2023)、「PS&D」

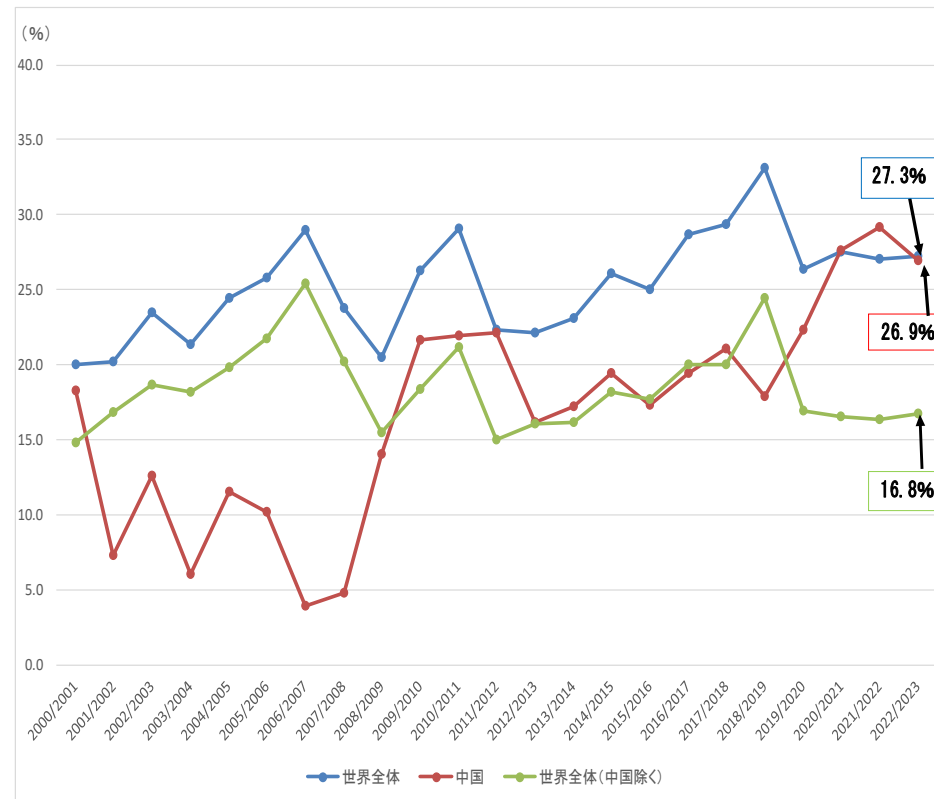
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(January 12, 2023)

注：1)穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

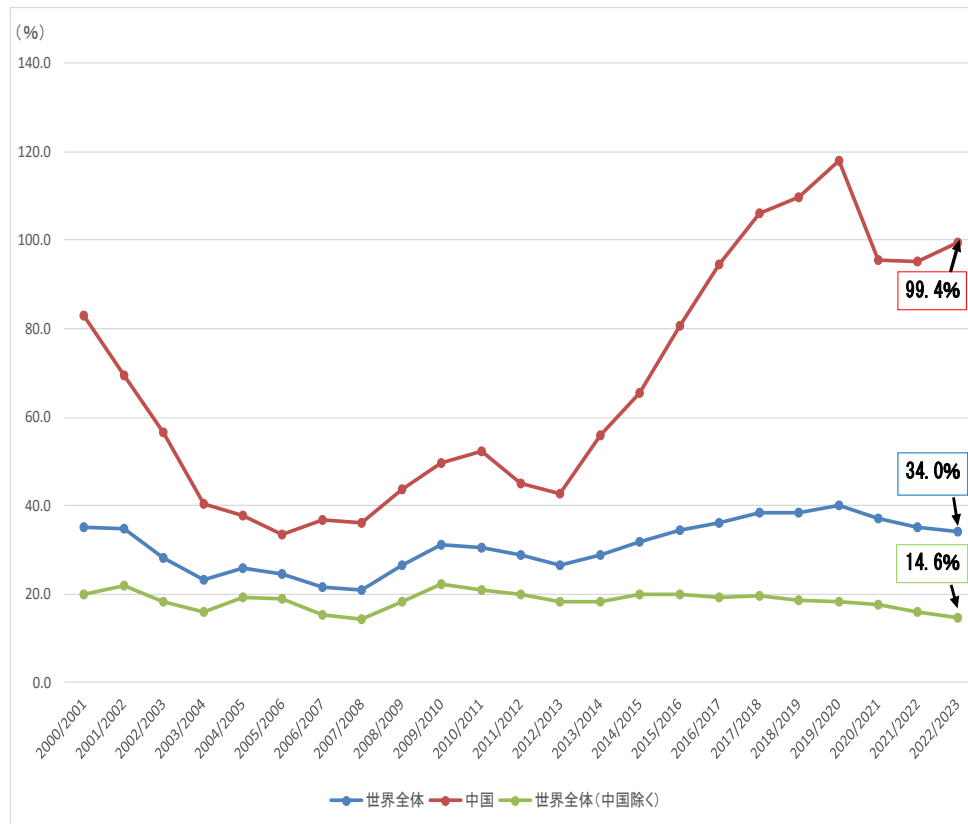
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

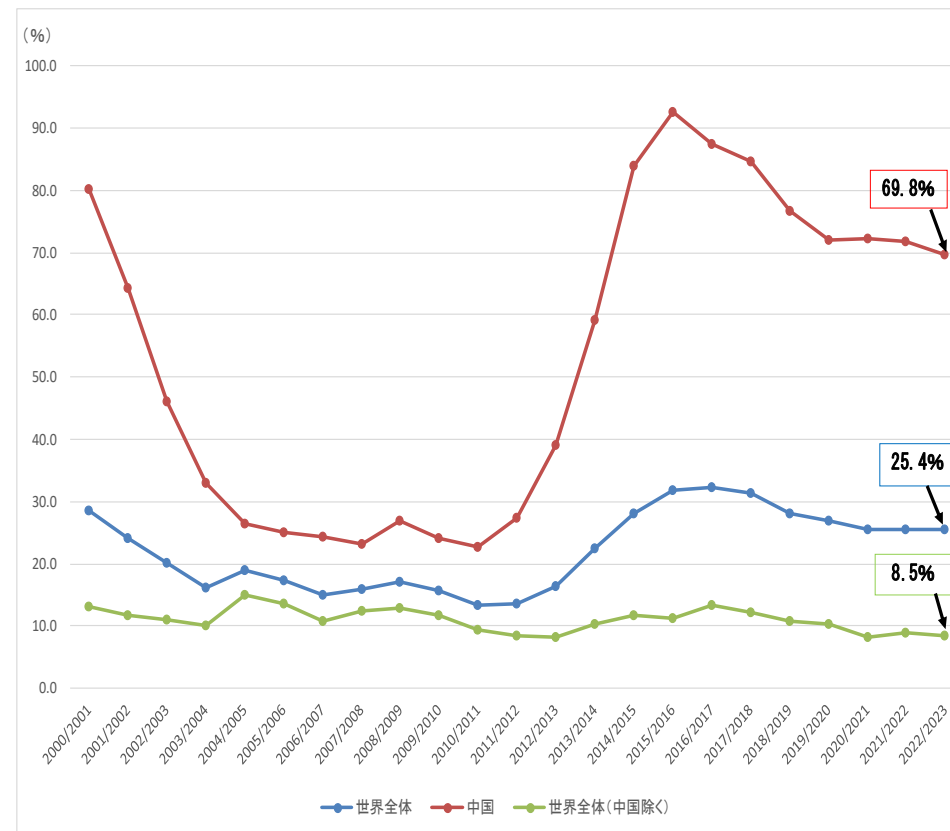
4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2023)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

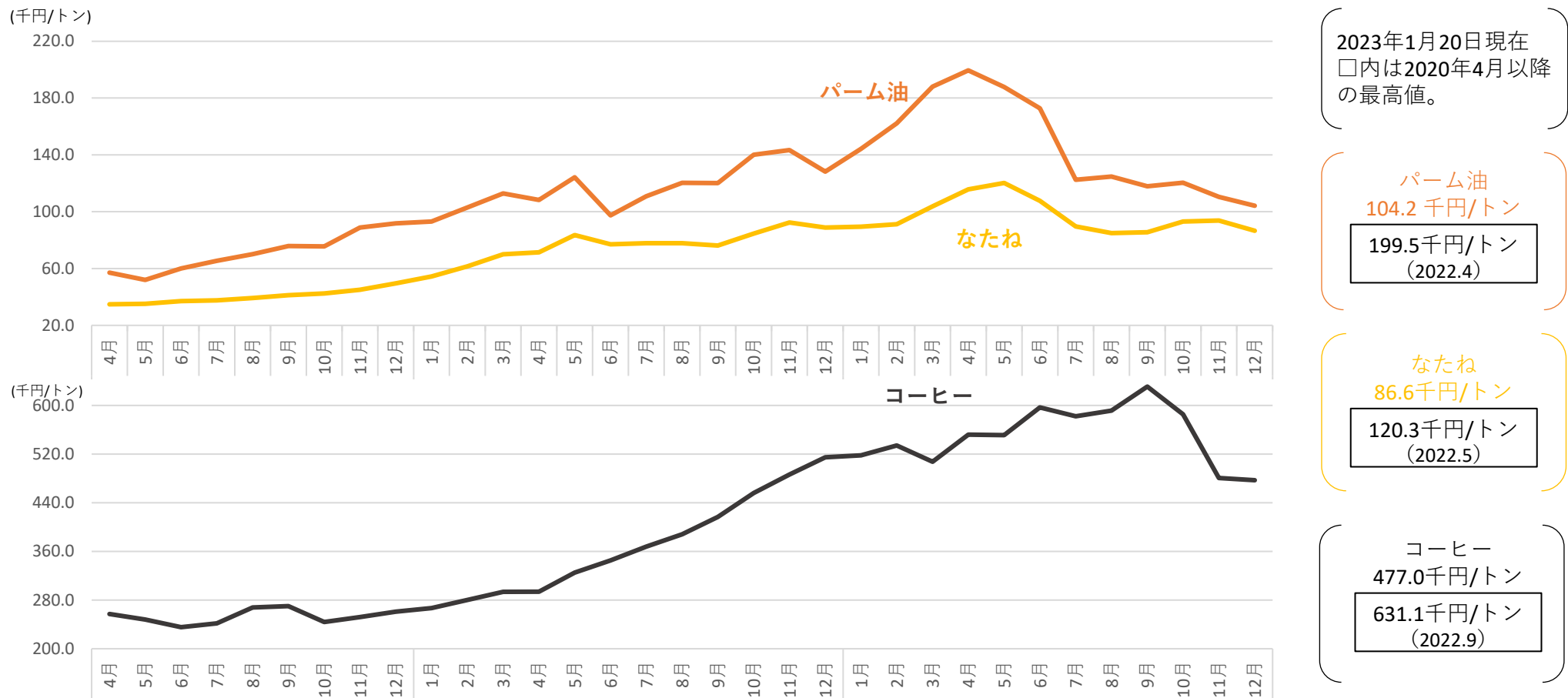
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダで減産があったものの、作付・生育状況が良好であり、平年並みの収量が見込まれている。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置の解除（2022年5月23日）やマレーシアの生産量の増加予測が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

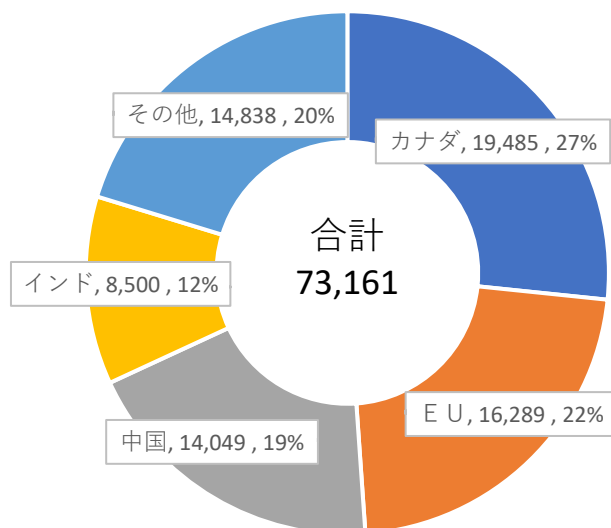


※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

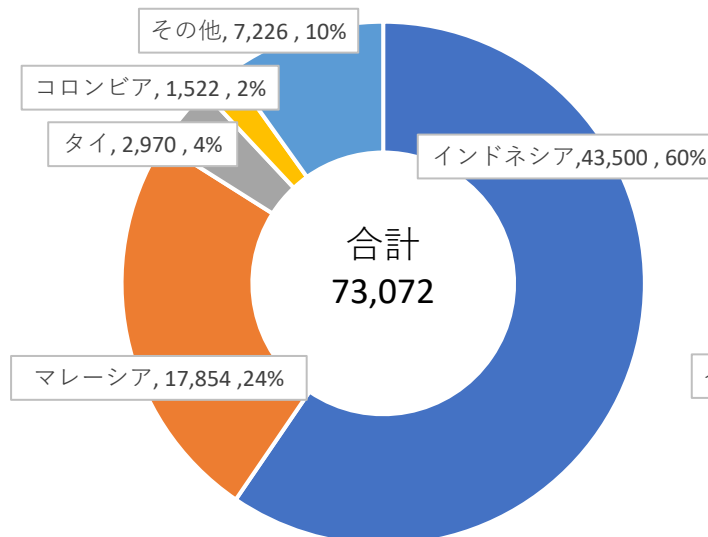
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



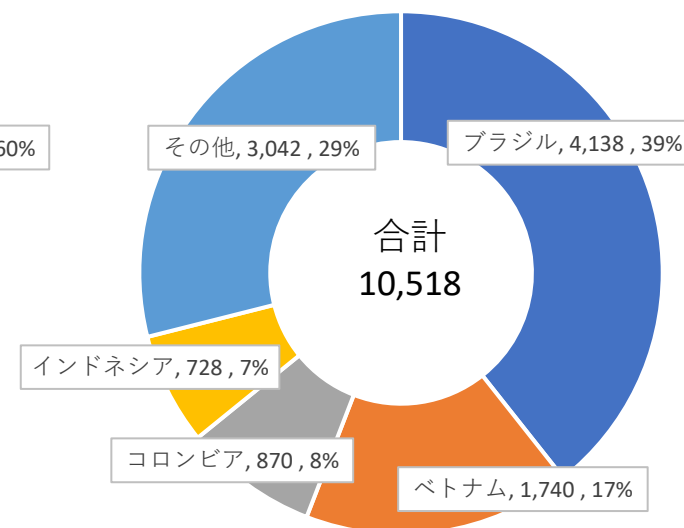
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	36.4%
ベトナム	100	25.0%
コロンビア	48	11.9%
その他	108	26.7%
合計	402	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2
前年同 月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年12月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.7～162.5（前年同月比で－1.2%～33.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年7月～令和4年12月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	111.9	114.4	113.8	113.7	114.2	114.1	14.1%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	113.7	114.9	112.4	112.3	114.2	111.6	13.3%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	104.9	105.1	106.7	108.3	109.1	109.9	7.2%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	145.8	150.4	156.8	160.2	162.7	162.5	33.6%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	99.9	100.1	103.4	103.6	104.9	104.4	7.0%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	125.2	126.5	127.0	133.7	136.1	137.4	22.6%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	106.2	106.6	113.2	117.1	118.6	117.5	23.3%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	99.1	99.4	98.7	98.8	98.5	98.7	-1.2%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	103.8	104.2	105.0	106.7	107.9	108.3	7.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年7月～令和5年1月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R4								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	109.8	111.1	110.7	110.9	111.3	112.2	111.5	0.8%	9.2%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	111.2	111.2	110.0	110.0	110.6	110.6	111.2	0.0%	13.0%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	103.3	103.7	104.2	107.2	107.2	107.6	108.5	0.4%	6.8%
食用油 (キャーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	139.1	148.3	156.8	160.6	161.2	161.2	162.2	0.0%	36.2%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	99.8	100.4	101.7	102.5	102.7	102.7	102.3	0.0%	4.7%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	117.2	118.3	116.9	126.2	128.9	128.3	129.6	-0.5%	22.4%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	105.0	104.5	108.0	114.4	115.4	110.9	116.9	-3.9%	18.6%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	99.0	99.3	98.6	98.6	98.6	98.6	98.6	0.0%	-1.1%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年2月号（1月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）牛肉輸出量が拡大、10月としては過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002571.html

（豪州）牛輸出量低迷も、今後は輸出増に向けた好機との見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002572.html

（ブラジル）牛肉生産量は22、23年と2年連続で増加を予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002573.html

◆豚肉

（米国）22年10月の肥育豚価格、前年同月比で大幅に上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002574.html

（メキシコ）23年の豚肉生産量は前年比4.6%増の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002575.html

（EU）豚肉生産量は減少、豚肉価格は低下の傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002576.html

（中国）需要期を迎えるも、下落に転じる豚肉価格

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002577.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆鶏肉

(タイ) 鶏肉価格は高値持続も下落傾向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002578.html

◆牛乳・乳製品

(EU) 生乳取引価格の記録的高騰は続くものの、伸び率鈍化

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002579.html

(豪州) 生乳生産量の前年割れ続く

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002580.html

(NZ) 生乳生産量は前年割れが続くも、乳製品輸出額は過去最高の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002581.html

◆飼料穀物

(世界) 世界の期末在庫が5カ月連続下方修正され、3億トンを下回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002582.html

(世界) 生産量などは据え置かれ、世界期末在庫は引き続き1億トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002583.html

(米国) 米国輸出量が下方修正され、期末在庫率は8.9%まで上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002584.html

(ブラジル) 22/23年度トウモロコシ、大豆生産量ともに過去最大の見込み

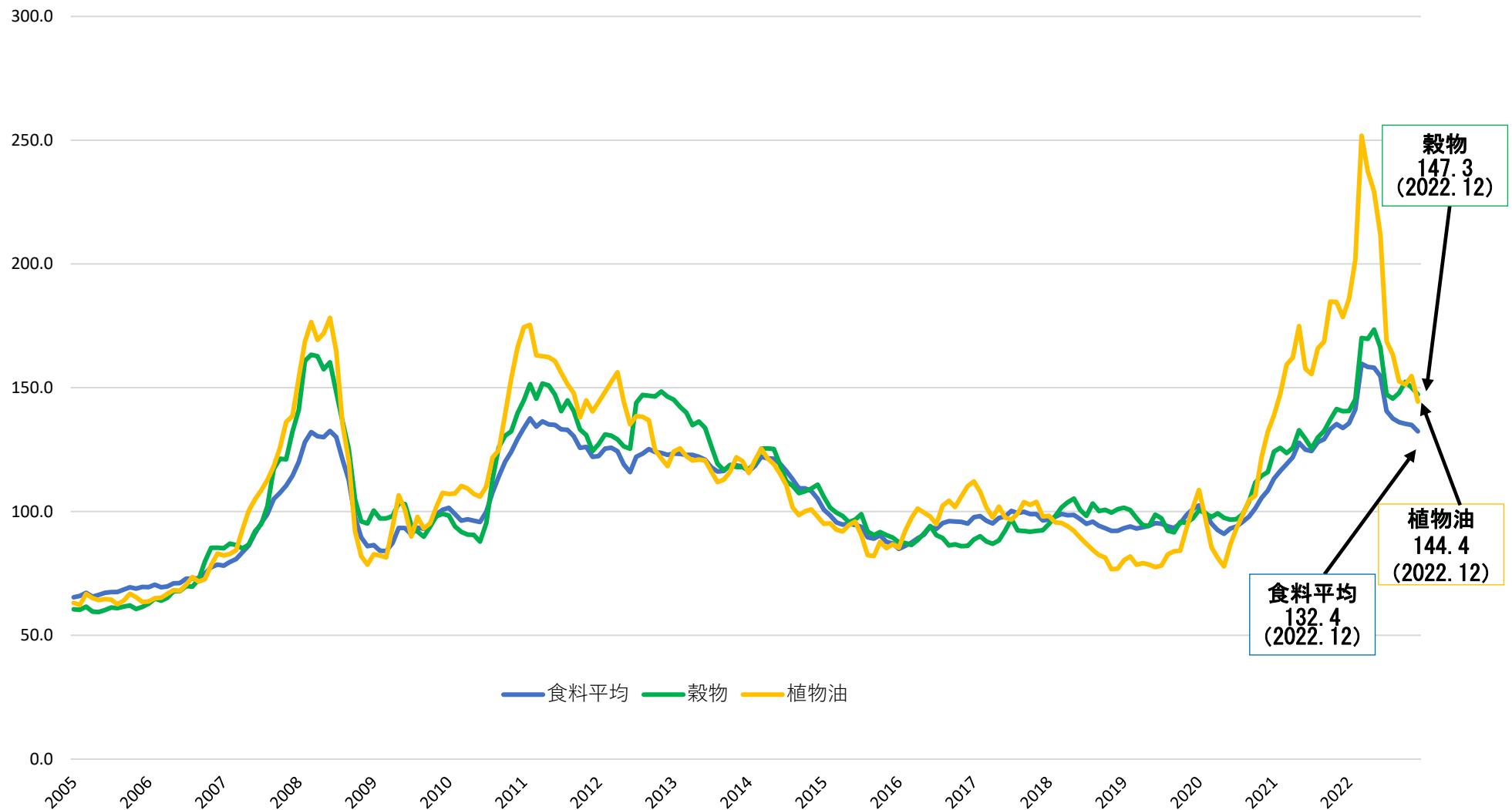
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002585.html

(中国) トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002586.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2023.1)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等